「白道」を読んで

那賀川　眞理

あの夜は何の流れだったのか、私達は寂聴さんの徳島の家に集まっていた。私達とは寂聴塾生の五、六人だった。はっきり覚えていないが、本当に何でも無い話をダラダラとしては笑っていたように思う。寂聴さんもニコニコと聞いていらした。そしてその前の座卓には色紙が積まれていた。私達の話があまりにもしょうもないものだったので、寂聴さんも飽きられたのか手元の硯に墨をすり、色紙をとって何か書き始められた。さらさらと描いていたものは、なんと私達の似顔絵だった。それぞれの特徴をよく捉えられていて、私達はまた笑った。そしてまた筆をとると、次は文字を書かれた。その中に「白道」というのがあり、私はそのスッキリした感じが気に入り、それを頂いた。「白道」……勉強不足の私には何のことか解らなかった。それどころか頭の中では、ＮＨＫ「みんなの歌」で歌われていたビバルディ作曲「四季」の「冬」に歌詞をつけた「白い道」が流れていた。

「先生、どういう意味ですか？」と尋ねたところ、「今書いているのよ」とおっしゃったようなうっすらとした記憶がある。

だいぶん経ってから、「白道」とは西行のことを書いた作品だと知り、いつか読まなくてはと思いつつ三十年ほども過ぎてしまい、ようやく瀬戸内寂聴全集拾七巻で読むこととなった。

西行はもともと裕福な武士の出自で結婚をして子供もい

たのに、二十三歳で突然出家した。その決意を表す逸話が、駆け寄る愛娘を縁側から蹴り落とした、というのだ。自分勝手に出家する父親の態度として、いかがなものか。しかし、今年九十三歳になる私の母に聞くと教科書に載っていたという。せめて娘を避けようと自分が縁側から転げ落ちるという方が私には納得できる。

そうまでして西行はなぜ出家したのだろう。寂聴さんは「自分が出家するまで西行は嫌いだったのに、次第に好きになってきた。」と言われたうえで、「よく引越する」「幼い子供を捨ててきたこと」と自分との共通点をあげている。そして出家してからもますます歌に励んだ西行の生き方に、同じく文筆家として生き抜く決心をした寂聴さんは共感したのだろう。八百年前も出家というのは寺の子息がするのがほとんどだったそうだ。西行が在家から出家した理由はまだまだ明確にはなってないらしい。が、寂聴さんはこう続ける。「自分の生き方を選んだのは自分の性格であろう。運命などではない。人は生きている全ての時間に自分の生を選び続けている。」

「白道」とは、全集の解説に、「題は、『花に問え』の中にも書いた二河白道の話から選んだ。」とあり、その「花に問え」では、

白道とは、「唐の浄土教の祖の善導の観無量寿経の注釈「観経疏散善義」に出てくる比喩を絵にした二河白道は、（略）

旅人の行く道の彼方に河が横たわり道をさえぎっている。南に燃えさかる火炎の河、北に逆まき波だつ波浪の河、その二つの河の間にわずか身ひとつが歩ける細い一筋の白い道が通っている。道の左右から、常に絶え間なく火炎と波浪がおそいかかり、道はかくされ通れそうにもない。背後には、群賊や、悪獣が追ってきて、今にも旅人に襲いかかろうとする。

後ろへ逃れても死をまぬかれず、前に進んでも生きられそうにない。進退きわまった旅人の耳に河の彼岸から、前へ進めと声がする。背後からは、進めば死ぬぞ引き返せと声が迫る。

旅人はどうせ死ぬなら前進しようと、命がけで細い道を駆け抜けて行く。

河の彼岸には浄土が待っていて、旅人を救いとってくれる。」

とある。

西行にとっての白道を挟む二つの河とは、鳥羽天皇の后だった待賢門院璋子（たまこ）への熱い恋心を断ち切るために幼い子供を捨てて出家したことと、生涯詠み続けた和歌への強い思いではないかとある。

西行が北面の武士として奉仕していた同時期には平清盛もいた。源平の戦いなど戦が絶え間なく起こった時代だった。歌を詠むことが好きで、蹴鞠が上手といった西行に武士はむいてなかった。仏教にそう詳しくもなかったのに憑かれたように出家したのは、その時の政治状況や長びく戦から、回避するように本能が動いたのもあるだろう。

出家した西行は東山、鞍馬、嵯峨に庵を構える。その後東北へ旅立つ。「修行してまかりけるに」と「山家集」には書いているが、熱心に「歌枕」に足を運んだようだ。「歌枕」とは、「古歌に詠み込まれた諸国の名所」（広辞苑）で、白洲正子さんは「古歌に歌われたというだけで人跡希な辺境の地に、千年もの間語りつがれ、生きつづける歌枕の不可思議な力が気味悪い」といわれたそうだ。とはいえ今でいう「聖地巡礼」だ。歌を人生それ以上に愛する西行も、その跡を追った芭蕉も、歌の舞台になった所へはぜひとも行きたかったに違いない。それも辺鄙な場所であるほど到達したときの達成感は一層となったのではないか。

その後も、西行は嵯峨野、高野山、伊勢をはじめ様々な所で庵を結ぶ。「二見浦のわびしい、しかし清廉な草庵のたたずまいが目にみえるようである。自然石の硯、花籠や扇の文台とは何というつつましい暮らしぶりだろうか。」その頃は一般の民家も簡素な作りだろうけれど、「草庵」とは更にシンプルな物なのだろう。信仰と歌が生活の全てという暮らしには、物はいらなかったのだろう。心のむくままに身軽に旅をし、気に入れば住むという軽やかな生き方には憧れる。

六十九歳で再び東北へ向かう。目的は東大寺再興のための勧進だった。漂泊の歌人も「生涯の絶唱」といわれる「命なりけり」などの歌を詠む。よほど過酷な旅だったに違いない。それでも鎌倉では源頼朝と会い砂金を送る手筈をきっちり頼み、夜を徹して二人で話し込む。翌朝頼朝から銀製の猫をもらうも、館の外に出るとそこにいた子供にやったという。

先日映画「インディー・ジョーンズと運命のダイヤル」を見た。ジョーンズ博士は退職の日に形ばかりの祝賀会で職場の仲間から記念の時計をもらう。が、大学の建物を出

たところにいたホームレス風の男にホイっとあげてしまったのだ。西行の話を思いだし笑ってしまった。

その後西行は嵯峨に戻り、休息の日々を過ごしたようだ。庵の前で遊ぶ子供達を優しく見つめた歌を詠んでいる。その解説の後に、小さな子が西行をかくれんぼに誘う可愛らしいエピソードを寂聴さんは添えている。もちろん寂聴さんの全くの創作だ。西行はこの後、河内の弘川寺へ居を移している。命がけの旅から終の住処になる場所へ向かうまでの嵯峨での日々が西行にとっていかに心穏やかな日々をもたらせてくれたか、この短い文を加えることで見事に描かれていると感じた。私が「伝記小説」のおもしろさを改めて知った部分だ。

晩年、「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月の頃」と歌ったとおり、西行は七十三歳の二月十六日に弘川寺で亡くなった。この二月は旧暦なので、梅か桃か桜かは咲いていただろう。

それにしても寂聴さんの凄いところは、西行の足跡の殆どの現場に足を運んでいるところだ。歌の歌われた、庵を結んだ、修行に励んだ場所へ出かけ、八百年前の名残を探しだし、地元の人と積極的に会話する。

あの時間、私達の似顔絵を描きたわいもない話につきあって下さっていた頃、寂聴さんは膨大な資料を読み、日本中の西行ゆかりの地へ足を運んでいらしたのだ。あの静かなほほえみの後ろにどれほどのものすごい熱量を抱えていたのかと改めて思うと同時に、全く気づかなかった自分が本当に恥ずかしい。

しかし、中途半端な好奇心で舌足らずの質問をするよりは、はるかに良い時間だったかも知れない。